

〈論文〉

# 小規模校園において9年間を見通して育む幼小接続研修の成果

— 共同研究による幼小教員への意識調査から —

## Outcomes of Kindergarten and Elementary School Connection Training Nurtured in a Small-scale School Looking Forward to Nine Years ; From Awareness Survey Toward Kindergarten and Elementary School Teachers through Joint Research

丁 子 かおる

Kaoru Choji

(和歌山大学教育学部)

2023年11月29日受理

### 抄録

In connection with kindergartens and elementary schools, there is a need for schools and kindergartens to connect curricula, improve them, and create bridge programs beyond exchanges, but they are not yet in a sufficient situation. Therefore, this research summarizes the three-year joint training between Wakayama Municipal Saikazaki Elementary School and Kindergarten and Wakayama University, and the results of an awareness survey of participating teachers conducted in the final year, and considers the results. Then, we propose clues for promoting kindergarten and elementary school connections.

キーワード：幼小接続、小規模校園、意識調査、成果

### 1. はじめに

幼保小接続において交流を超えて教育課程の接続やその改善、架け橋プログラムの作成が学校・園に求められ進められているが、未だ十分な状況ではない。そこで、本研究は、幼小接続における国内の経緯と小規模校園である和歌山市立雑賀崎小学校・幼稚園と和歌山大学との共同研究で行った3年間の幼小接続研修の概要と、最終年に行った参加教員への意識調査の結果をまとめ、その成果から考察する。そして、幼保小接続を進める手がかりを提案する。

### 2. 幼保小接続の経緯

平成18年の教育基本法改正<sup>1</sup>や平成19年の学校教育法の改正で<sup>2</sup>、学校種の最初に幼稚園が位置づけられ、体系的な教育が組織的に求められるようになった。これを受けて、平成20年告示の幼稚園教育要領の改訂では指導計画作成の留意事項に「(5)幼稚園教育と小学校教育との円滑な接続のため、幼児と児童の交流の機会を設けたり、小学校の教師との意見交換や合同の研究の機会を設けたりするなど、連携を図るようにすること。」の記載がされ、「接続」が示されるようになった<sup>3</sup>。

そして、平成22年に幼児期の教育と小学校教育の円滑な接続の在り方に関する調査研究協力者会議で「幼児期の教育と小学校教育の円滑な接続の在り方について(報告)」が示され、幼児期から大学までの体系的な

教育の実施を進める中で<sup>4</sup>、「「小1プロブレム」等の課題を踏まえ、幼稚園、保育所及び認定こども園と小学校との連携を一層強化し、子どもの学びの連続性を確保することが重要」という認識が示された。これによって国内では、幼小接続の取り組みが国立大学附属幼稚園などで実施されるようになり、特にお茶の水大学附属幼稚園と小学校の研究を基に5歳児の10月から小学校1年生の7月までを「接続期<sup>5</sup>」として紹介され広く共有されるようになった。

この時、文部科学省は、接続期には幼児教育ではアプローチカリキュラムの実施、小学校ではスタートカリキュラムの作成を各学校園に求め、幼児期の教育と小学校教育との接続が本格的に進められるようになっていく。

その後、平成29年度学習指導要領、幼稚園教育要領、保育所保育指針、幼保連携型認定こども園教育保育要領(以下、3要領・指針とする)の改訂に伴い、学習指導要領と3要領・指針に「学校段階間での接続」が告示化されて記載されるようになった。

こうした経緯から、これまでも行われてきた学校園で卒園時・新入学時の情報伝達や引継ぎはもちろんのこと、小学校では幼小接続担当の教師と年長児担任を中心とした教職員間の研修会、児童と幼児の交流授業・保育が進められ、学校園単位や、都道府県、市町村の教育委員会でカリキュラム作成が進められていく。

そして、令和4年3月には文部科学省は、「幼保小の架け橋プログラム」の実施等を示し、手引き等を取りまとめて公表した<sup>6</sup>。ここでは、幼児教育・保育の無償化の実施とそれに伴う質向上などを背景<sup>7</sup>と幼小接続における現在の課題を挙げている。そして、幼稚園の5歳児クラスと小学校1年生の2年間を架け橋期とし、架け橋プログラムを作成するなどを提唱し、取り組みを促している。

### 3. 幼保小接続の課題と現状

#### 1) 接続としての課題

しかしながら、小学校におけるスタートカリキュラムは互いに十分な理解が深まらないままに作成されているケースや、小1プロブレムの解消を目的とするケースも多い。加藤・高濱・酒井・本山・天ヶ瀬は、就学前教育と学校教育の接続における国際的な動向としてStarting Strong II<sup>8</sup>等から、「移行(transitions)における配慮は、とりわけ貧困層や母語以外の言語圏で生活する子どもたちにとって、有効な人生のスタートをきるために重要な意味をもつ」ことを指摘し、「国内の問題認識と比較して、長期的な人間発達と社会的な格差是正に重点がおかれていることが海外の研究動向の特徴である」と国外の状況を説明する<sup>9</sup>。その上で、国内の幼保小の連携・接続が「小1プロブレム」に特化し、小学校教育への適応が第一義的に掲げられる」ことを課題とし、「幼保小の連携・接続は今日の社会変化に対応する教育システムの再編の一画として検討する必要がある」と主張する<sup>10</sup>。

そもそも、平成22年の幼児期の教育と小学校教育の円滑な接続の在り方に関する調査研究協力者会議で報告された課題では、「幼小接続を円滑に行うためには、幼児期の教育と児童期の教育の違いと連続性・一貫性の調和を図ること」<sup>11</sup>としている。ここでは、幼児期の教育と児童期の教育の発達の違いによるそれぞれの特性を尊重することを基本としながらも、幼児期の育ちや学びが十分に小学校教育に生かされてされていない状況から、子どもにとっての育ちと学びの連続性・一貫性の調和を確保することが求められていたといえる。

その上で、この報告では、「幼小の教育を「教育の目的・目標」→「教育課程」→「教育活動」の順に展開する3段階構造でとらえることが必要」である<sup>12</sup>とし、当時からこの報告では小1プロブレムを回避し、入学後の児童の混乱を緩和するための一過的な接続ではなく、互いの教育の理解を促進することを前提としていたことが分かる。ただし、この3段階構造の順に進めることは、多忙な中、その時々で活動を考えることはできても、互いの十分な理解をなしに質の高い教育課程の構想には困難がある。

また、加藤・高濱・酒井・本山・天ヶ瀬は、全国の336校園(内訳は小学校131校、幼稚園77園、保育所128

カ所)を対象にした校種間連携について郵送による質問紙調査を平成21年に行い幼保小連携・接続の課題をまとめている<sup>13</sup>。そこでは、一貫した教育課程については成果がほとんど確認できないとする回答が大半であったとする。「子どもについての情報伝達」を「大変意識している」と「意識している」を合わせて93.2%であり、「子どもの実態や保護者の理解」は「大変意識している」と「意識している」を合わせて85.4%と強く意識されているのに対して、「一貫した教育課程」では「大変意識している」と「意識している」を合わせても29.5%であったという。また、「連携の結果成果があがったと思われること」でも「一貫した教育課程」は「大変成果があがった」と「いくらか成果があがった」を合わせて13.1%しかなく、成果をあげにくい状況があるという<sup>14</sup>。これらから「連携の取り組みで意識されているのは、主に小学校教師による新入学児の情報の取得であり、幼保小を貫く教育課程の流れや、相互理解については未だ不十分である」と結論付け、教育委員会など外部機関のサポートについての検討が提案されている<sup>15</sup>。

このように接続が進まないことの背景として佐々木は「小学校区の多種多様な幼児教育機関の存在や取り組みのリーダーシップ、日常の業務や教育活動の整理、精選などの課題」<sup>16</sup>がみえると指摘する。幼児教育機関の在り方は幼稚園、保育所、認定こども園があり、設置及び事業者、形態や認可の有無など多様である。また、地域行政の管轄も教育委員会と子ども家庭局などに分かれており、施設の在り方と同様にアプローチは多岐にわたる。そして、幼稚園教諭や保育士、保育教諭、小学校教師も、日常の業務は多く、多忙であり、ゆとりがないのも実情である。

そこで、これらを促進するため、文部科学省は都道府県や市町村各関係部による各学校、施設への支援や、基本方針や支援方策の策定を促した<sup>17</sup>。その後、文部科学省、国立教育政策研究所教育課程研究センターは小学校に向けてスタートカリキュラム導入・実践の手引き<sup>18</sup>を作成し、スタートカリキュラムの考え方やデザインと実践、校内組織の立ち上げによるマネジメントの事例などを紹介し、都道府県や市町村各関係部局は幼保小接続研修や、県や市などの単位でスタートカリキュラムの作成のための冊子を作成し、授業や保育の参観とアドバイスを行うなどの様々な取り組みを行うようになった。

#### 2) 接続としての現状

こうした流れを受けて現状を理解するために、文部科学省が全国の幼稚園・幼保連携型認定こども園を対象に行っている「幼児教育実態調査」のうち、「平成20年度 幼児教育実態調査」<sup>19</sup>と「令和3年度 幼児教育実態調査」<sup>20</sup>から見てみる。幼児と児童の交流については、平成20年度には「幼稚園・保育所の幼児と小学

校の児童と一緒に交流」は20.2%であったが、令和3年度では「年数回の授業、行事、研究会などの交流があるが、接続を見通した教育課程の編成・実施は行われていない(41.3%)」と、13年で交流については倍増している。

ただし、平成20年度には「幼稚園・保育所・小学校と一緒に教育課程の編成について連携」している割合は5.7%であったのが、令和3年度では、「授業、行事、研究会などの交流が充実し、接続を見通した教育課程の編成・実施が行われている」が26.2%、「接続を見通して編成・実施された教育課程について、実施結果を踏まえ、更によりよいものとなるよう検討が行われている」が8.7%であった。ここから、教育課程の編成については合わせて34.9%と進んでいるものの教育課程の改善は1割にも達していないことが分かる。また、13年を経て交流については4割を超え、教育課程の編成についても3割には満たないものの進んでいるが、全体としては文部科学省が示した第5段階のうちのステップ2の交流段階までの市町村が計6割強にとどまっているのが現状である<sup>21</sup>。

こうした幼小接続が十分に進まない背景として、先の佐々木が指摘するように、小学校教師にとっては日常業務における多忙感がある中<sup>22</sup>で自己の研鑽や教育の向上につながる成果が見えにくいことが考えられる。幼小小の連携担当者が日常の業務に加えて、単に就学後の子どもたちの混乱をさけるためだけに、幼小小接続に取り組むには負担がある。そこで、筆者は教師や保育者にとって、幼小が互いの理解を行うことで、自己研鑽や教育の向上につながる実感が持てる取り組みや成果を感じられることが、当事者である教員の意欲につながると考えるようになった。

ところでこうした接続がもたらす成果には、どのようなものがあるのだろうか。

#### 4. 幼小接続の効果

##### 1) 幼小接続研修の成果についての意識調査

本研究開始2年目となる令和3年に一前・秋田・天野は幼小小接続と研修について調査し、研究成果を公表している<sup>23</sup>。平成28年に5児クラスを担当した保育者125名と小学校1年生を担当した小学校教師47名に対して質問紙調査を行い、小学校体験交流や行事への参加交流、要録の情報伝達、行事参観による教職員間交流、講演への参加、相互交流・合同研修、授業・保育参観と協議会、教育の連続性を意識したカリキュラム作成、教育の連続性を意識したカリキュラムに基づく授業・保育、特別支援研修会の11の取り組みについて、質問紙を用いて調査している<sup>24</sup>。調査は、「保幼小連携接続の取り組みの効果」と「保育者・小学校教師自身の保幼小接続の具体的効果」について「1:まったく成果がなかった」から「4:とても成果があった」

の4段階で回答を求めたという。その結果、子どもと教師に対してどちらも最も効果が高いと認識されていた取り組みは「小学校体験」による交流であり、子どもへの効果は平均3.71、保育者・教師への効果は平均3.63であったという。また、「特別支援の研修会」が子どもへの効果で平均3.40、保育者・教師への効果は平均3.45と共に高く、次に「行事の参加・見学」による交流で子どもへの効果が平均3.31、保育者・教師への効果が平均3.26であったという。そして、「連続性のあるカリキュラムに基づく保育・教育」は子どもへの効果で平均3.20、保育者・教師への効果が平均3.16であったという。また、教師への効果では、年間交流計の決定や情報交換のための打ち合わせ」と「講演が主体となった研修」「小学校教師と保育者による相互交流研修・合同研修」がいずれも平均3.21と高かった。ただし、最も子どもへの効果が低いと認識された取り組みは「講演を主体とした研修会」で平均2.77だったという<sup>25</sup>。

最も効果が高かった「小学校体験」や行事での交流の理由としては、幼児が小学校授業を見学したり参加したりするために小学校教師は話し方や進め方など「幼児の認知的・情緒的な側面を理解し授業を計画する必要」があり、保育者は小学校教師が授業を計画するための「情報提供」や、異なる環境における幼児の振る舞いを観察して園での保育・教育に役立てることが考えられている<sup>26</sup>。また、休み時間の幼児と児童の交流や、幼児が小学校で給食を体験したりする小学校体験では、小学校教師が幼児への児童の関わりを観察できる機会となり、保育者にとっては児童の授業時間外の過ごし方や小学校教師が児童の社会性をどう伸ばそうするかなどを知る機会になるとされ、結果、小学校教員と保育者の双方にとって「移行期の子どもを理解し、保育・教育の内容を振り返る場となっている」と述べられている<sup>27</sup>。

そして、「連続性のある接続期カリキュラムに基づく保育・教育」や「特別支援教育についての研修会」では、「保育者や小学校教師が教育の連続性に配慮した環境を用意したり、特別支援の教育の方法や工夫について学んだりすることで、子どもが園から小学校へ円滑に移行する効果が間接的に得られたとの認識を保育者や小学校教師が持ったと推測される」と述べられている<sup>28</sup>。

その後、施設、免許資格、自治体の違いによる違いについても検討され、取り組みを長く行っている市の保育者や小学校教師の方が保育者と小学校教師の違いの認識や小学校生活に関する知識など複数の要素を認識しやすくなり、効果を高く認識していたという。また、小学校教師において幼児期と児童期の両方の免許資格を持つ方が、「要録による情報伝達」や「相互交流研修」などで、より高い効果の認識につながることで、研



修時に両方の知識を持っていることでより多く発言して研修参加者の意見を理解しやすくなったことが理由に報告されている<sup>29</sup>。

## 2) 研修内容と回答された効果との関係

また、一前らは、質問紙調査から得られた「保幼小接続の具体的効果」を18項目の回答から因子分析を実施し、「自己研鑽」、「連携の方針の共有」、「園と小の相互理解」、「特別支援の強化」の4因子を抽出し相関性を調査している<sup>30</sup>。「自己研鑽」は、保幼小接続の観点から保育・教育の振り返りや幼児期から小学校低学年までの学びの連続性の理解、「連携の方針の共有」は保幼小接続の取り組みの評価についての話し合い、「園と小の相互理解」は、指導・援助の仕方の相互理解や移行期の子どもへの課題の共有で、「特別支援の強化」は、配慮事項の保護者との話し合いや早期支援の相談である。

その結果、自己研鑽と11の取り組みとの間ではすべて中程度の相関があり、「連携の方針の共有」、「園と小の相互理解」、「特別支援の強化」では小から中程度の相関があったという。このことから「保幼小連携の取り組みは、ある一つの取り組みが特定の効果をもたらすと認識されておらず、ある一つの取り組みが複数の効果をもたらすものとして保育者・小学校教師による認識されていたと考えられる」と述べられている<sup>31</sup>。そして、ここでも自己研鑽と関連して様々な研修を行うことが効果的であることが分かる。

## 5. 小規模校・園における幼小接続研修

ここからは、実際の事例として筆者が関わった和歌山市立雑賀崎小学校・幼稚園と和歌山大学との共同研究事業で令和2～4年までの3年間に行った幼小接続研究<sup>32 33 34</sup>について述べ、成果をまとめる。

### 1) 研究の背景

和歌山市立雑賀崎小学校・幼稚園は、研究を開始した令和2年では児童数36名、園児数24名の小規模校で、校長は兼務である。小学校では異年齢の縦割りグループ「つみき」があり、特別活動等の話し合い場面で高学年児童が低・中学年の児童をまとめたり年少児童に意見を尋ねたりなど役割を持って行動していた。授業中も児童が積極的に意見を出し合い教え合う姿があったり、運動会の種目を話し合っって児童が決めたりなど、児童が主体となれる教育を行っている。幼稚園は、友達を尊重しつつ遊びの中で難しいところを教え合い助け合い、アイデアを出し合っって遊ぶ姿や、教師に見守られながら自分のペースでじっくりと遊ぶ姿もあった。

幼小連携については、これまで小規模校園の特色を生かして日常から児童と幼児が行き来するなど子ども同士が連携・交流する取り組みがされてきたが、文部科学省の指標とするスタートカリキュラムの作成<sup>35</sup>や

教育課程の編成はされていないステップ2の状況であった<sup>36</sup>。(新型コロナウイルス感染拡大で次第に幼小間の交流はこの3年間に困難となった。)

ただし、共同研究を行うにあたって研究の目的を校長を中心に幼稚園と小学校本研修担当教員と筆者で話し合った結果、研究では、一時的な接続期に焦点を当てたスタートカリキュラムを作成するより、子どもの主体的な学びを共有しながら幼小連携を続けている雑賀崎小学校・幼稚園において特色を生かした取り組みを行うこととなった。それは、小規模校園として全員の教員が連携し合うことで、幼児期からの育ちと学びを小学校につなぎ、子どもが主体となって教え合い学び合いを行い、「9年間を見通して育む質の高い教育、育ち育てあう小規模校・園による教育実践を行う」ことを目指すことである。

そこで、大学との共同研究の機会を活用して、互いの教育を学び合い、子供を理解する機会として教員間での研修を中心に本共同研究を位置づけ、幼小合同研修と研究を行うこととした。ただし、感染症流行の状況によって、予定していた研修は幾度と中止となりつつ進めてきた。

### 2) 研究の方法

共同研究では、令和2年度からの3年間で、幼児期から児童期にかけての育ちと学びを理解し合い、共有することで、教員間で小学校と幼稚園教育についてその特性や指導と援助・支援の方法の違いなどについて共通理解を行った。方法としては、校内研や園内研を幼小の合同研修とし、年間計画に位置づけ、幼小の保育及び授業の向上につながる研究保育及び授業を実施し、幼小教員が参観したり、ビデオカンファレンスをしたりして保育や授業を評価し、各教員の経験や考えを話し合っって理解を深める協議を行う。保育や授業を振り返る評価と自らの経験や考えを基に協議を行う過程で、互いが学び合い、視野を広めることで、自らの保育や授業の改善に役立てること(自己研鑽<sup>37</sup>)、そして、子どもを幼小で連携して子どもの学びと育ちを支えることを意図して、雑賀崎小学校・幼稚園のすべての教員と大学教員で幼小の教員が合同研修を行った。研修の際にはその時々で指導案や教育課程、記録等と「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」(以下、10の姿)<sup>38</sup>の資料が準備され、それを参照しながら協議を行った。大学教員としての筆者は幼小教員の意見について時に整理し言葉を補足して説明した。研修には和歌山大学の学生も参加した<sup>39</sup>。

そして、「9年間を見通して育む質の高い教育、育ち育てあう小規模校・園による教育実践を行う」ために、以下の3点を目的として研究を進めていくことになった。

- ① 幼児期から児童期の発達と学びについて9年間を通して捉える。

- ② 幼児教育と小学校教育における指導と支援・援助を教員間で共有する。
- ③ 幼児と児童の連携を年間を通して継続して行う。

研修会には職員室で留守番をする教員を除くと概ね全教員が参加して3年間行った。

表1は、各年度における共同研究の内容である。

## 6. 年度ごとの幼小連続合同現職研修実施内容

### 1) 令和2年度の実施内容(1年目)

令和2年の研究としては、第1回に幼小教員間で共同研究のための協議、第2回に子どもの学びと育ちの姿について接続する教育・保育(地震・防災保育の共同での実施は別途報告<sup>40</sup>)、第3回は、幼小それぞれの教員による育ちと学びを記録し検討するエピソード記録を用いての検討会を行った<sup>41</sup>。

このうち第3回は、1回目で幼児教育と小学校教育における子どものみとりについて共有することを目指し、幼小共にエピソード記録を幼小教員に依頼したところ、幼稚園から1名、小学校から2名の教員から資料提供があった。幼稚園4歳児担任教諭からは4歳児クラスでの自由遊び場面で幼児が「磁石」を紙管の中に落としたことをきっかけに、磁石の性質を試し、その後、釣りやクレーンゲームに発展していくエピソード記録の報告と協議があった。小学校養護教諭からは児童保健委員会で卒園児でもある委員会児童が幼稚園を訪問して健康啓発活動を行った事例、小学校2年生担任教諭からは学び合いを大切にする授業で国語科「かさこじぞう」における重いものを引きずってもってくる「ずっさんずっさん」の表現を児童が教え合う場面、算数科における自然と生まれた教え合い場面、幼稚園年長児との生活科での交流場面について、エピソード記録が出され、これらを基に協議を行った。

一部を取り上げると、幼稚園4歳のエピソード「磁石」についての協議では、小学校教員より10の姿では(8)の数量と(3)の協同性の姿がみられたこと、小学校3年生理科で磁石を使った工作を行う単元があり同様の活動があることが紹介され、幼児期に遊びの中で学

ぶことで就学時には学習の素地ができていると意見があった<sup>42</sup>。幼稚園からは(6)思考力の芽生えで、4歳なりに物の性質に気付いていること、(9)言葉による伝え合い、自分の力でやってみて友達と考える、(3)協同性や、諦めずにやり遂げようとする、(2)自立心について、場面から説明があった<sup>43</sup>。

また、小学校から出されたエピソード記録を基にした協議では、小学校2年生の国語科の事例では、発表者より幼稚園で培われた表現の力が引き継がれて言葉だけでなく表情や動きで表現された場面であったとして紹介された。そして、幼稚園より「かさこじぞう」の事例から幼稚園教員は言葉を知ってほしい、言葉で表してほしいと急いでしまうことがあるが、小学校国語科でも言葉だけでなく動きでも友達に伝えている姿につながっていくと学べたと話した。保健委員会の取り組みからも、幼稚園での経験が児童となって幼児に関わろうとする姿につながっていると感じた、子どもの姿から気付きあえて良かったという意見があった<sup>44</sup>。

5年生担当の小学校教員からは、雑賀崎幼稚園で一人一人が大切に育てられてきているので児童たちが互いに優しく、支援の必要な児童もいるが全員の児童が意見を言えるまで待ったり声をかけたりしてくれるので温かく、全員が意見を言えるクラスになっていると話し、幼稚園で色々な経験をいのが分かるのでそれを基に伸ばしていきたいと述べられた。

このように、9年間を見通した幼稚園・小学校との研修では、幼小の教員間でそれぞれの発達過程・段階と遊びから学習活動へのつながりについて活動の共通理解と見通しが持てる取り組みとなった<sup>45</sup>。

### 2) 令和3年度の実施内容(2年目)

2021年度の第1回は第1学年生活科研究授業参観と協議会、第2回は地震防災保育・教育の共同で実施<sup>46</sup>、3回目は3歳児園内研究保育と協議会、第4回は3歳児のビデオカンファレンスを実施した<sup>47</sup>。

第1回目の9月は小学校1年生の生活科研究授業を参観し、その後、協議を行った。内容は、後日に幼児と1年生が交流する宝物探しクイズや昔遊びを協力し

表1 令和2～4年度幼小連続合同現職研修実施日程及び内容

		日時	内容	場所
令和2年度	0	事前打ち合わせ：8月7日(金)	テーマの検討と幼稚園における週案の書き方検討	雑賀崎幼稚園
	1	11月5日(木) 9:15-11:30	地震防災保育・教育	雑賀崎小学校体育館
	2	12月4日(金) 15:30-16:45	研究方法等協議	雑賀崎幼稚園遊戯室
	3	1月28日(木) 15:15-16:45	エピソード記録検討会	雑賀崎幼稚園遊戯室
令和3年度	1	9月9日(木) 13:30-(5時間目)	第1学年生活科研究授業と協議会	雑賀崎小学校
	2	11月5日(金) 9:00-11:30	地震防災保育・教育	雑賀崎小学校体育館
	3	10月14日(木) 15:30-16:45	3歳児園内研究保育と協議会	雑賀崎幼稚園遊戯室
	4	11月11日(木) 15:30-16:45	3歳児ビデオカンファレンス	雑賀崎幼稚園遊戯室
令和4年度	1	7月7日(木) 15:30-16:45	4・5歳児ビデオ・フォトカンファレンス	雑賀崎幼稚園遊戯室
	2	10月12日(水) 13:00-15:00	3・4・5歳児園内研究保育と協議会	雑賀崎幼稚園遊戯室

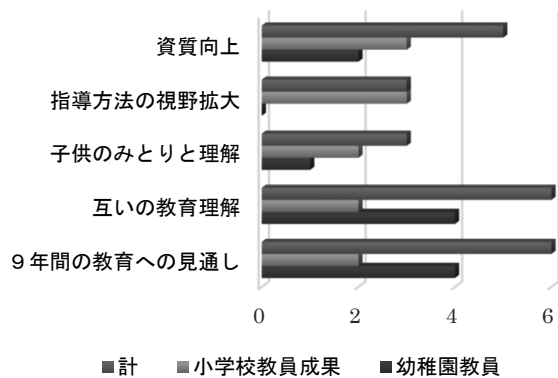


図1 令和4年幼小合同研修の自由記述記載による成果項目別人数(小6名、幼4名)(筆者作成を抜粋)

て取り組む学習が計画されており、この日は、その小単元の初回で1年生児童が協力し合い、クイズを基に探検して宝探しのように学校探検をする授業であった。授業終了後の協議では、幼稚園教員から「授業者が子どもを大切に話を聞いてくれるので児童同士も話を聞く、待ってくれる姿があり、心動く場面がたくさんあった。」と、授業者からは「幼稚園の遊びの中で培った遊びの力がB児にはあるため、子供同士がつながっていきける。」と話がされた<sup>48</sup>。

第3回と第4回は幼稚園3歳の公開保育研究と3歳ビデオカンファレンスであった。10月の研究保育では、園庭での自由保育で3歳が砂場でのごちそうづくりやごちそうごっこ、水や土、ドングリ、虫などの自然物や生き物に関わった遊びなどで、3歳児が自分のしたい遊びを試す姿や保育者との関わりの中でイメージを広げていく姿、友達の遊びを真似ながら一緒に遊ぼうとする姿がみられた。11月の幼小合同研修は、9月時点での3歳児の虫捕りの遊び場面についてビデオを視聴し、保育者による説明の後、協議を行った。協議では、小学校教員より「普段では3歳の保育をみる機会がないので貴重な経験であった」「幼児に教師が声をかけた援助で、虫について幼児が思考を広げられた場面があった。」「靴下を自分で脱いでからあそぶなど3歳児なりの生活力がみられた」などの意見があった。11月のビデオカンファレンスでは、(幼児が自分でできることを増やすため)関わりを減らして援助していくなど発達に合わせた援助についても保育者より説明があった。小学校教員から「(保育者が)幼児本人の気持ちを代弁して話してくれるので、幼児同士が伝え合っている」という関わり方について「研修で動画をみることで1年生児童が幼稚園での経験で育ってきたことが振り返ってみられる」という意見があった。また、この研修を行った日も3人の幼児が小学校まで虫捕りにきており、その際の姿についても紹介がされた<sup>49</sup>。

合計13名の教員より収集した自由記述を分析し、その成果について内容ごとに件数をまとめたものが図1

である<sup>50</sup>。感想の他、資質向上や視野拡大など学校園や自らの学びとして成果を積極的に記載していたのは、12名のうち幼稚園教員で4名、小学校教員6名の8割であった<sup>51</sup>。得られたデータは、結果、自由記述で「教員の資質向上」を成果として挙げたのは幼稚園と小学校教員のいずれも5割と多かった<sup>52</sup>。そして、特に幼稚園教員は「9年間の見通し」と「互いの教育理解」について記載した全員が成果を示しており、小学校教員は「指導方法の視野拡大」と「資質向上」がそれぞれ5割、「9年間の見通し」と「互いの教育理解」、「子供のみとりと理解」については3割が自由記述で成果を記述していた<sup>53</sup>。つまり、幼小教員間で得られたと実感した成果については違いがあったことが分かる。幼稚園教員は互いの教育理解を深めたことで9年間の見通しが持てるようになっていったこと、小学校教員は幼児教育を理解し、幼稚園教員による指導や援助から子どものみとりと理解を深め、9年間の見通しを持てるなど、視野を広げる機会になり、資質向上につながったと自由記述での記載からは考えられる。次は、感染症が拡大し、2回のみの実施となった最終年の内容をまとめる。

### 3) 令和4年度の実施内容(3年目の最終年)

第1回で4・5歳児ビデオ・フォトカンファレンス、第2回で3歳児園内研究保育と協議会を行った<sup>54</sup>。1回目である10月に4・5歳児複式クラスの保育についてビデオ映像を基に教員間で協議を行った。担任よりそれまでの子どもの姿について説明があり、虫取り場面と、捕獲したモンシロチョウを年長児が図鑑で調べる場面などの動画を、幼小教員と筆者、大学生で視聴し、その後、10の姿を基に、協議を行った。続く11月の第2回は、園庭での活動を中心に3～5歳児全クラスで公開保育を行った。砂場で砂の感触を確かめたりお料理ごっこをしたり、穴を掘ったり山をつくるなどの遊びや、藤棚の豆やサツマイモをつかっておままごとの遊び、築山に登る、ボールを蹴りや虫取り、ごっこ遊びなどの遊びがあった。保育を参観後、幼小教員間で協議を行った<sup>55</sup>。

第1回目と2回目小学校教員は幼児教育の理解や、幼児の名前と共に遊びの姿を根拠に幼児たち一人一人に応じた育ちと学びを話し、前年度と比べて成長を喜ぶ姿があった。また、そこから小学校につながる学びを語る姿もあった。そして、小規模校であることで教師に子どもの活動が見えすぎて、子どもが息苦しさを持っていないかなど共通の悩みを話し合う<sup>56</sup>など、隣り合う校園の同僚性の共有が見られた。また、幼稚園教員は、小学校教員の幼児教育への理解が深まるにつれて、伝わっている意識からそれぞれの年齢の子どもに応じた援助をより詳しく説明するようになっていた。そして、小学校教員による幼稚園教員の援助や環境設定についての肯定的な意見が増えるにつき、自身の保



育を振り返り気付く様子があった。小規模校・園での取り組みであったため、教員間での意見交換がしやすく、理解と共に連携が深まったと考えられる。

## 7. 最終年(令和4年度)共同研究のアンケート結果と成果

### 1) 教員による意識調査及び自由記述の分析と結果

以上、3年間の共同研究事業で、幼小で授業・保育の参観やビデオカンファレンスと協議を行ってきた。継続的取り組みによって、小学校教員は幼児教育への理解や、幼児たち一人一人の育ちと学びの姿を細かくみつけ、生き生きと話した。また、小学校でつながる学びや、小規模校の困難を共有するなど、互いに認め合い同僚性の育みもみられた。幼稚園教員は、小学校教員の肯定的な意見から自身の保育の自覚化がされたり良さに気付いたり、研修に参加したことで小学校教員にも言葉で積極的に説明するなど意欲の高まりもみられた。小規模校・園特有の指導上の課題や困難、その工夫を出し合うなど、連携が深まり効果を実感しているようであった<sup>57</sup>。

そこで、参加した小学校教員7名と幼稚園教員4名の計11名に参加してよかったか、参加年数、その他10項目等を質問しアンケート調査を行った<sup>58</sup>。項目は、①幼小互いの教育理解、②幼児期の終わりまで育ってほしい姿の共有、③資質・能力をつなぐカリキュラムの改善、④継続的幼小連携への意識、⑤教員としての資質向上、⑥自身の指導力の向上、⑦指導方法の視野、⑧子供のみとりと理解、⑨幼小9年間の教育への見通し、⑩幼小教員間連携への意識、⑪その他で、成果に対する認識の度合いを5件法で尋ねた。回答は参加者全員より得られ、その結果をまとめたのが図2である。

参加年数による平均値を比べてみたところ、特に小学校教師で違いがあり、1～2年間の参加小学校教員3名では全体平均で4.21、3年間の参加小学校4名では4.43とわずかにポイントが高くなっていた。幼稚園教員においては変化がみられなかった。

次に、質問4で「参加してよかったか」の質問には7割強が「とても良かった」、3割弱が「良かった」と回答し、参加教員全員が良かったと回答し、参加した全員にとって研修の良さが共有されていたことになる。項目全体を平均してみたところ、成果について「とて

もそう思う」が6割強、「そう思う」が約3割を占め、ほとんどで成果や向上を実感していると回答し、成果を意識していることが分かった<sup>59</sup>。研修時の印象と同様、成果の表れである。

項目別では、⑩幼小間教員の意識と④継続的幼小連携への意識においては約8割が「とてもそう思う」、2割弱%が「そう思う」と回答し、全員が成果と向上と回答し<sup>60</sup>、今後への意欲が表れていた。幼稚園の教員から自由記述でも以下のように書かれている。

小学校の先生方と小規模校園における子供に対する思いや気持ちを協議の中で共有し、これからどう子供を育てていくことがベストであり、どう向き合っていっていいのかを考えさせられました。小規模校園のいいところをもっと考え、幼小一緒に子供の資質や能力をつないでいけるようにしていきたいです。

ここから、小学校と幼稚園の教員間で、協働性や同僚性について成果があったことが読み取れる。

次に⑤教員としての資質向上においても「とてもそう思う」が7割強が回答し、「そう思う」は3割弱と合わせると、11名全員が成果と向上があったと回答した。教員としての資質向上については、自由記述で小学校教員より記載があり、研修を継続していくことで「自身の理解を少しずつ深めていけた」と書かれていた(表2)。

初めて幼稚園の公開保育を参観した時、どのようにみていいのか分からなかったことが忘れられません。幼小で合同研修を重ねていくことで、幼稚園の先生方から教わることも多く、幼児期の学びが小学校へどのようにつながっていくかなど、自分自身の理解を少しずつ深めていけたように思いありがたく思っております。

他にも①幼小互いの教育理解や②幼児期の終わりまでに育ってほしい姿の共有などは6割強で「とてもそう思う」、4割弱で「そう思う」でこちらも全員で成果があったと答えた。⑦指導方法の視野についても4割強が「とてもそう思う」、5割強で「そう思う」と回答して全員で成果があったと答えた<sup>61</sup>。また、指導方法では、研修で幼稚園教員の指導と援助をみたことで小学校教員が自由記述で以下の指導意識の変容が述べられていた。

子どもが苦手なことや積極的になれないことに向かい合ったとき、まずそのときの気持ちを受止めないといけな

平均	参加年数	参加評価	①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧	⑨	⑩	全体平均
小学校	2.29	4.57	4.43	4.57	4.29	4.71	3.71	3.71	4.29	4.43	4.23	4.71	4.33
幼稚園	2.00	5.00	5.00	4.75	4.25	5.00	4.75	4.50	4.75	4.75	5.00	5.00	4.80
幼小	2.18	4.72	4.63	4.64	4.27	4.82	4.09	4.00	4.45	4.55	4.55	4.82	4.50

図2 幼小合同研修における成果意識度調査(5件法による項目ごとの平均)

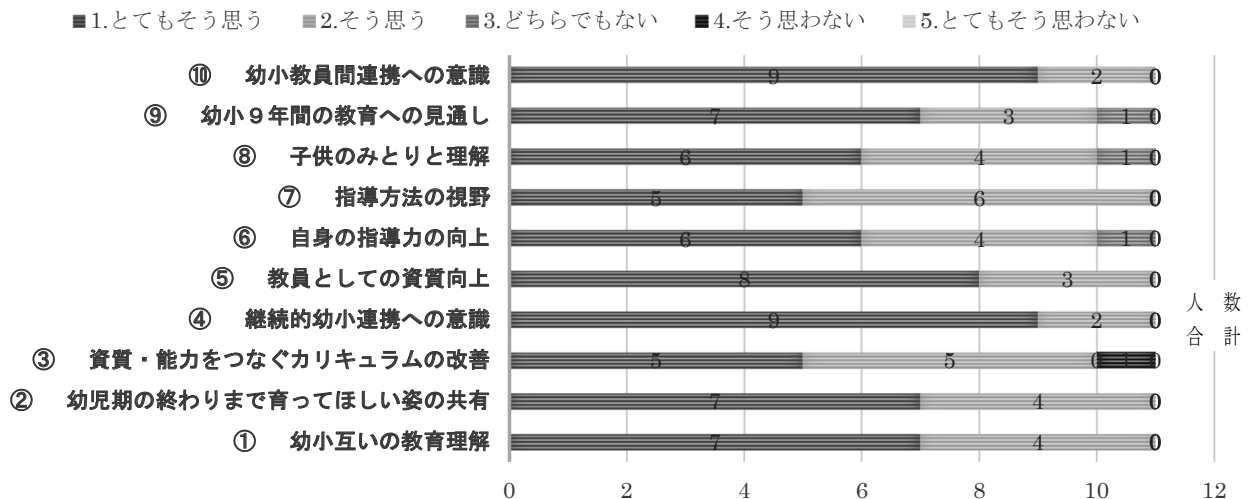


図3 幼小合同研修参加教員による項目別成果及び意識向上度(5件法による。筆者作成で引用抜粋)

考えるようになった。できていることを認めて、次に進んでいけるような声かけを工夫したいと考えている。

その他、⑨幼小教育の見通しや⑥自身の指導力の向上は、⑧子どものみとりと理解、③資質・能力をつなぐカリキュラムの改善は、「とても思う」と「そう思う」を合わせて9割で成果があったと回答した。このうち、③資質・能力をつなぐカリキュラムの改善については、文部科学省で求められている教育課程の作成につながる項目であるが、この3年間でカリキュラムと取り上げて検討はしなかった。それにも関わらず、全体平均では4.27として各教員で成果があったとしており、小学校教師にとっては4.29とより高い評価となっていた。公開保育やビデオカンファレンス、小学校教師から幼児の遊びの姿の中で、「これは小学校は5年生で取りあげる学習と近く驚いた」といったコメントが幾度と合ったことから、成果が示されたと考えられる。つまり、教育課程はあくまでも目標として、それ以前に、こうした個々の教員による子どものみとりと理解を深めていくことが教育課程作成にも役立てられ、成果につながると考えられる結果であった。

また、自己研鑽にかかわる⑤教員としての資質向上、⑥自身の指導力の向上、⑦指導方法の視野、⑧子どものみとりと理解、⑨幼小9年間の教育への見通しの5項目のうち、全体の平均4.50からすれば⑤教員としての資質向上は平均4.09(小学校3.71)で、⑥自身の指導力の向上が平均4.00(小学校で3.71)と、この2項目が低いながらもかなり高い数字である<sup>62</sup>。授業を担当しない管理職と、参加1～2年目の一部の教員で成果や向上が「3.どちらでもない」であり、役割や年数によっても成果の違いがあった。

研修初参加の教員も経験のある教員との共同研修を行ったことで理解が促されて次第に発言していく姿があった。幼小接続研修を行う過程で、幼児教育と小学校教育の理解を行うこと、連携や9年間の見通しを持

つことと同時に、幼小接続を共有し話し合うことは、8割の教員が継続的連携や意識向上を回答しているように、子どもたちだけではなく、資質向上や子どものみとり、指導法の視野向上などで、教員の指導や支援などの資質向上となり教師としての成長にもつながっていると意識していることが今回の成果となった。

また、意識の変容や今後につながる成果についての記述を自由記述から見てみる。小学校教員では7人中4人が自身の意識の変容や今後につながる成果について「気持ちを受止めないといけなくなるようになった」「自分自身の理解を少しずつ深めていけた」「参考にできることが見つかった」などを述べていた。このうち、校長は、「小規模校園の特色づくりを生き残りを賭けた中で、教職員への意識付けを行ってこれた」として研究テーマとして幼小9年間の育ちと学びの連続性について教職員全体が意識づけできたことを成果として記述している。

幼稚園では4名中3名が意識の変容や今後につながる成果について「(協議の中で子どもと)どう向き合っていたらいいのかを考えさせられました」「保育観の変容につながり」「新たな視点に気づいたり、発見があったりしました」と述べた。研修を受けた11名中7名が自由記述でも自分や教員の意識の変容や成果を述べ、他にも幼小接続の重要性を述べられていた。つまり、教員としての資質能力の向上を自由記述でも半数以上で述べていたことになる。

以上より、公開保育・授業、動画、資料などを基に研修を行ったこと、小規模校園であることで、意見や質問が出しやすく理解が深まったことが考えられる。また、小規模校園として、次第に同僚性の育みと共に研修が進んだことで、一層の話し合いが充実していったことも影響していると考えられる。

幼小接続のみを目的とするのではなく9年間の育ちを通して理解することで視野の拡大や同僚性の育成を



表2 自由記述(教員の変容と今後につながる成果)

	(3)自由記述 ※ <u>教員の変容と今後につながる成果</u> に下線を引いている
小学校教員	子どもが苦手なことや積極的になれないことに向かい合ったとき、まずそのときの <u>気持ちを受止めないといけ</u> ないと考ええるようになった。 <u>できていることを認めて、次に進んでいけるような声かけを工夫</u> したいと考えている
	初めて幼稚園の公開保育を参観した時、どのようにみてよいのか分からなかったことが忘れられません。幼小で合同研修を重ねていくことで、幼稚園の先生方から教わることも多く、幼児期の学びが小学校へどのようにつながっていくかなど、 <u>自分自身の理解を少しずつ深めていけたように思い</u> ありがとうございます。
	幼稚園の活動や幼児の実態を知る事で発達段階の違いや学習へつながる成長の過程、また低学年の学習のきっかけや導入の課題な <u>参考</u> にできることが見つかった。
	幼稚園のビデオカンファレンスなのですが、元々どんな遊びや生活、周りの子ども達との関わり合いをしているのかあまり分からない上での5分程のビデオだと意見を出しづらいと感じたことがありました。その一方で公開授業の方が「 <u>前と比べて〇〇くん周りの子どもとコミュニケーションとれてるな</u> 」など気づきを見つけやすかったです。
	スタートカリキュラムは小学校だけで行うものではなく、幼小の連携が大切だと思います。前任校でも近隣幼保園等に何をやってきたかなどの聞き取りをして、生活科の授業に関連させたり、授業の活動に生かしたりしていました。どの小学校でも必要なことだと思います。
	参観やビデオカンファレンスの合同研修で、幼小また職種によって各々の立場と視点で幼児期に育てほしい10の姿に照らし合わせて、子どものみとりをし意見交換をすることは幼稚園から小学校へのスムーズな移行と9年間の見通しをイメージするために重要なことだと思う。そしてこれは幼小互いの教育活動の見直しと発展につながり、子どもの健やかな成長につながると思う。
	園での子どもの姿や保護者の様子を見て、幼小連携・接続といった取組を柱に、未知の幼小での勤務を何とかやっていこうと思ったものでした。当たり前のことですが安全・安心の確保、子どもが主人公になって自由に活動できる環境づくりを幼小の連携の中で取り組んでこれたように思います。 <u>小規模校園の特色づくりを生き残りを賭けた中で、教職員への意識付けを行ってこれたのではないのでしょうか。(管理職)</u>
幼稚園教員	小学校の先生方と小規模校園における子供に対する思いや気持ちを協議の中で共有し、これからどう子供を育てていくことがベストであり、 <u>どう向き合っていきたいのかを考えさせられました</u> 。小規模校園のいいところをもっと考え、 <u>幼小一緒に子供の資質や能力をつないでいけるようにしていきたい</u> です。
	幼小をつなぐ学びと育ちの連続性の共有についての研究の構築が自分にとって①～⑩の学びや深い理解につながった。何よりも <u>保育観の変容につながり、今後も共同研究し合っていきたい</u> 。
	小学校の先生方から見た幼児の姿について聞くことができ、新たな視点に気づいたり、発見があったりしました。また、小学校に向けて育ってほしい力についても教えていただき、とても勉強になりました。
	協議会ではそれぞれの視点から子どもの姿を見取り、10の姿に照らし合わせてどのような育ち、学びをしているのか、また教師の援助は適切だったかなど、昨年よりより踏み込んだ話し合いができたように思います。互いの保育・授業を見る経験は <u>とても学びが多いので来年も続けていきたい</u> と思います。(管理職)

行い、何よりも一人一人の教員が成長していく場として、幼小接続の機会を捉えることが大切であることが、本研究から分かった。また、研修の経験によって見え方も異なっているため、研修を継続させること、研修経験が豊富な教員と共に学びあうことが理解を深められる糸口になると考えられる。

## 2) 自由記述からのテキストマイニング分析と結果

自由記述による文書データを定量的に分析する手法としてテキストマイニングがあり、解析ソフトとしてKH Coder<sup>63</sup>がある。自由記述による回答結果を集計し、多変量解析することによって、全体を分類し要約する

ことで全体傾向を把握することができる。そこで、表2の幼小接続研修終了後の教員による自由記述の全体傾向を分析するために、KHCoderによるテキストマイニングを行い、共起ネットワークとして図示したのが図4である。尚、解析前に誤字脱字や表記の統一についてデータを一部修正し、頻出語の集計及び共起ネットワーク図の作成を行っている。

図を基に分析したところ、上部に位置する①子どもの見方・みとり、上部中ほどの②小学校への連携・接続、左中ほどの③幼児教育理解、左下の④教員研修について、右下の⑤子ども理解・学びの共有の5の観点

に分類され、バランスよく配置されていた。

右下の群である⑤子ども理解・学びの共有の領域が①～④すべてに近いことから、子供理解・学びの共有を具体的な子どもの姿や、目の前の子どもについて話し合うことが①～④に影響すると考えられた。また、左下の群④の教員研修については、「周り」を中心としており、「分かる」「気付く」「授業」「ビデオ」などに広がっていき、ビデオ研修や授業参観などの研修をとりながら協議をすることで、子どもたち、教員間の周囲からの意見や姿から気付きや理解が生まれて共有されて成り立っていることが推測される。

②小学校への連携・接続については、①の子どもの見方・みとりや③幼児教育理解、⑤子ども理解・学びの共有が隣接しこれらの間に位置し、幼小連携や接続が、総合的に進められていくことで深化を伴うものであると考察できる。このようにして、①～⑤で分類された群が互いにに関わり合うことで、それぞれが促されたことが考えられる。

## 8. 終わりに

雑賀崎小学校・幼稚園と和歌山大学との共同研究事業3年間の取り組みから研究を行った。その結果から考察されることを3点にまとめる。一つ目は、幼保小接続は教員間の協議を重視することで互いの教育や子ども理解が共有されるということである。互いに質問したり感想を自由に述べたりする機会があることで、対等な関係となり、同僚性の育みにもつながることが考えられる。二つ目は、研修を総合的に進めることで関連が持ちやすく深化されやすいことがある。3年間の研修を模索しつつ行ったことで様々な角度から発見があった。ビデオカンファレンスでは保育者と子どもの言葉にも注目しやすくなり、研究授業や保育では目の前の多様な子どもの姿を捉え伝え合える機会にもなった。三つめは、幼稚園も小学校も教員としての資質向上につながぐことで幼小接続の意欲が継続しやすいと思われたことである。本研究では、9年間を見通して幼稚園教員とバトンを渡された小学校教員が、子ども理解を深めつつ、自らの視野拡大や指導力の向上といった資質・能力の向上になっていったことで意欲の高まりがより見られるようになっていた。肯定的意見や

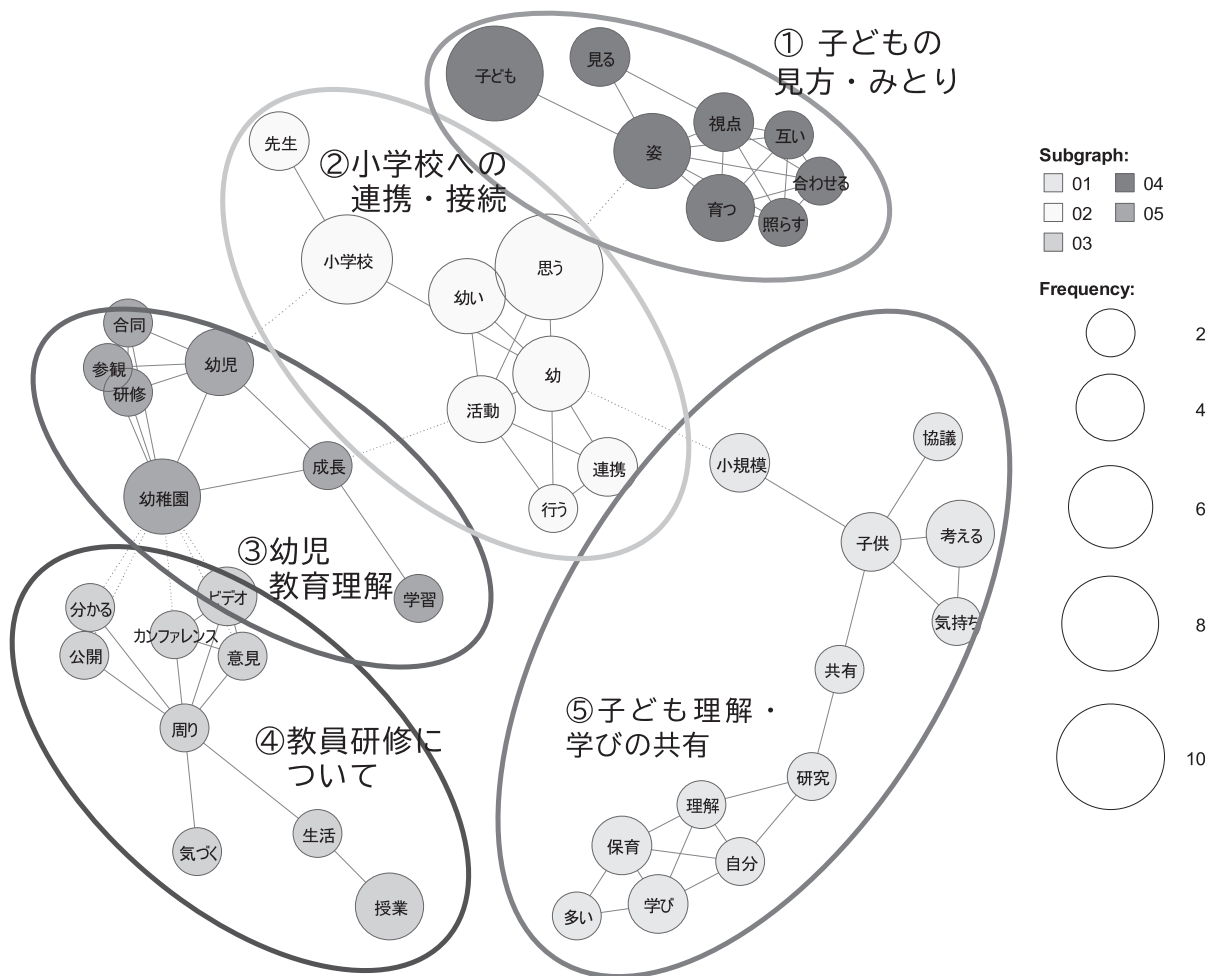


図4 幼小接続研修成果についての自由記述についての共起ネットワーク図

発見などによって教員としての自己の強みや良さの自覚にもつながったと思われる。つまり、幼小接続には「教育課程の編成・実施」を目的として直線的に接続を進めるよりも、「教員間の協議を重視」し、「研修を総合的に進める」こと、「教員の資質向上につなぐ」ことを複合的に進めていくことが重要であると言える。

小規模校・園を対象とした幼小接続の取り組みであるため、量的に成果を捉えることは十分ではないが、3年間の研究を継続していく中で互いの垣根は低くなり、9年間で協力して子どもを育む仲間として、子どもの育ちを共に喜び、学び愛、信頼し合って話し合う姿が教員間で増えていく様子を見ることができた。こうした組織の連携があれば、子どもとその保護者が就学への不安を大幅に下げることができ、幼児期の自信をつないでいくことになると思われる。その意味でも、架け橋期のみならず、一人一人の教員が自己の成長につながるものとして長期的視点で子どもを育むようになることを願っている。

#### 謝辞

新型コロナウイルス感染症蔓延で大変な中、本研究にご協力いただきました令和2～4年度和歌山市立雑賀崎小学校・幼稚園の皆様、和歌山大学教育学部幼児教育専攻の学生に、心より感謝を申し上げます。

本研究は、2020～22年度和歌山大学教育学部共同研究事業成果をまとめたものであり、論文の作成及び公表においては奥村孝校園長先生はじめ、雑賀崎小学校及び幼稚園の先生方の承諾を得ています。

#### 引用文献

- 1 文部科学省『教育基本法』「第十一条 幼児期の教育」；[https://www.mext.go.jp/b\\_menu/kihon/about/mext\\_00003.html](https://www.mext.go.jp/b_menu/kihon/about/mext_00003.html) (2024.6.25現在)
- 2 E-GOV「学校教育法第22条」；<https://elaws.e-gov.go.jp/document?lawid=322AC00000000026>
- 3 文部科学省『幼稚園教育要領 平成20年告示』フレーベル館，2008，p.15.
- 4 文部科学省；[https://www.mext.go.jp/component/b\\_menu/shingi/toushin/\\_icsFiles/afielddfile/2011/11/22/1298955\\_1\\_1.pdf](https://www.mext.go.jp/component/b_menu/shingi/toushin/_icsFiles/afielddfile/2011/11/22/1298955_1_1.pdf) (2024.7.25現在)
- 5 「接続期」は「人との関係や周囲の環境が大きく変化することに伴い、子どもたちの戸惑い・不安・期待・緊張などを、教師が丁寧に受け止め支えながら、教師と友だちとの豊かな関わりを基盤に、主体的に学ぶ姿勢を育む時期」として文部科学省「幼児期の教育と小学校教育の接続について資料3」；[https://www.mext.go.jp/b\\_menu/shingi/chousa/shotou/070/gijigaiyou/\\_icsFiles/afielddfile/2010/06/11/1293215\\_3.pdf](https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/shotou/070/gijigaiyou/_icsFiles/afielddfile/2010/06/11/1293215_3.pdf)，お茶の水女子大学附属幼稚園・小学校・中学校 子ども発達教育研究センター『「接続期」をつくる一幼・小・中をつなぐ教師と子どもの協働』東洋館出版，2008，p.10など (2024.7.25現在)
- 6 文部科学省「幼保小の架け橋プログラム」；[https://www.mext.go.jp/a\\_menu/shotou/youchien/1258019\\_00002.htm](https://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/youchien/1258019_00002.htm)

- (2023.1.5現在)
- 7 同上
  - 8 OECD『OECD保育白書：人生の始まりこそ力強く：乳幼児の教育とケア (ECEC) の国際比較』明石書店，2011.
  - 9 加藤美帆・高濱裕子・酒井朗・本山方子・天ヶ瀬正博「幼稚園・保育所・小学校連携の課題とは何か」『お茶の水女子大学人文科学研究 第7巻』お茶の水女子大学，2011，pp.87-98.
  - 10 同上，pp.88-89.
  - 11 幼児期の教育と小学校教育の円滑な接続の在り方に関する調査研究協力者会議「幼児期の教育と小学校教育の円滑な接続の在り方について(報告)」2010，p.7. [https://www.mext.go.jp/component/b\\_menu/shingi/toushin/\\_icsFiles/afielddfile/2011/11/22/1298955\\_1\\_1.pdf](https://www.mext.go.jp/component/b_menu/shingi/toushin/_icsFiles/afielddfile/2011/11/22/1298955_1_1.pdf) (2023.7.25現在) ここでは、ステップ0～4の5段階が示された。(ステップ0：連携の予定・計画がまだ無い。ステップ1：連携・接続に着手したいが、まだ検討中である。ステップ2：年数回の授業、行事、研究会などの交流があるが、接続を見通した教育課程の編成・実施は行われていない。ステップ3：授業、行事、研究会などの交流が充実し、接続を見通した教育課程の編成・実施が行われている。ステップ4：接続を見通して編成・実施された教育課程について、実施結果を踏まえ、更によりよいものとなるよう検討が行われている。)
  - 12 同上「報告の概要1」
  - 13 加藤ら前掲書9，pp.87-98.
  - 14 同上
  - 15 同上，pp.89-92.
  - 16 佐々木晃「小学校との連携・接続」『保育学講座5 保育を支えるネットワーク 支援と連携』東京大学出版会，日本保育学会編，2016，p.196.
  - 17 同上
  - 18 文部科学省、国立教育政策研究所教育課程研究センター『発達や学びをつなぐ スタートカリキュラム スタートカリキュラム導入・実践の手引き』学事出版社，2018.
  - 19 文部科学省初等中等教育局幼児教育課「平成20年度 幼児教育実態調査」文部科学省，2009，P.13-14. [https://www.mext.go.jp/component/a\\_menu/education/detail/\\_icsFiles/afielddfile/2011/05/31/1278591\\_01.pdf](https://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/detail/_icsFiles/afielddfile/2011/05/31/1278591_01.pdf) (2024.7.25現在)
  - 20 文部科学省初等中等教育局幼児教育課「令和3年度 幼児教育実態調査」文部科学省，2023，p.17. [https://www.mext.go.jp/a\\_menu/shotou/youchien/20230308-mxt\\_kouhou02-1.pdf](https://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/youchien/20230308-mxt_kouhou02-1.pdf) (2024.7.25現在)
  - 21 同上
  - 22 日本保育学会前掲書16
  - 23 一前春子・秋田喜代美・天野美和子『マルチステークホルダーの視座からみる 保幼小連携接続 その効果と研修のあり方』風間書房，2021.
  - 24 同上，pp.19-40.
  - 25 同上，pp.19-25.
  - 26 同上
  - 27 同上，pp.24-27.
  - 28 同上，p.24.
  - 29 同上，pp.24-27.
  - 30 同上，pp.32-38.
  - 31 同上
  - 32 丁子かおる，奥村孝，太田英一郎，的場かおり，青木茉莉，太田由美子，寺岡麻里，池谷義輝，北野美和，木下雄生，出口静，西川菜々子，森本孝子「幼小をつなぐ学びと育ち



- の連続性の共有：エピソード記録を通して』『和歌山大学教育学部共同研究事業成果報告書2020』2021, pp.138-142.
- 33 丁子かおる, 奥村孝, 太田英一郎, 中井麻由, 青木茉莉, 太田由美子, 数見佳子, 角忍, 池谷義輝, 北野美和, 木下雄生, 白井千聡, 出口静, 西川菜々子, 森本孝子, 中西大「幼小をつなぐ学びと育ちの連続性の共有」『和歌山大学教育学部共同研究事業成果報告書2021』2022, pp.149-154.
- 34 丁子かおる, 奥村孝, 戎浩晃, 中井麻由, 太田由美子, 角忍, 山田美月, 池谷義輝, 北野美和, 白井千聡, 出口静, 村木美奈, 森本孝子, 横井志穂「幼小をつなぐ学びと育ちの連続性の共有：小規模校園における協働的な学びと一人一人の表現に着目して」『和歌山大学教育学部共同研究事業成果報告書2022』2023, pp.108-113.
- 35 文部科学省 国立教育政策研究所 教育課程研究センター「スタートカリキュラム スタートカリキュラムの編成の仕方・進め方が分かる～学びの芽生えから自覚的な学びへ～スタートブック」2015;  
[https://www.nier.go.jp/kaihatsu/pdf/startcurriculum\\_mini.pdf](https://www.nier.go.jp/kaihatsu/pdf/startcurriculum_mini.pdf)(2024.9.12現在)
- 36 文部科学省が示した「幼児期の教育と小学校教育の円滑な接続の在り方について(報告)」のステップでは「年数回の授業、行事、研究会などの交流があるが、接続を見通した教育課程の編成・実施は行われていない」の第2段階である。
- 37 本研究は2020年度より開始しているが、一前ら 前掲23の研究成果は2021年公表である。一前らの研究結果で重視されている自己研鑽の視点は、本研究では2019年度計画段階当初より尊重し、教員間の連携や互いの教育理解についても大切に、共同研究を実施した成果をまとめた。今回の結果とも重なる要点である。
- 38 文部科学省『幼稚園教育要領 平成29年度告示』フレーベル館, 2017, pp.5-8.
- 39 2020年には新型コロナウイルス感染が拡大していたため、学生は筆者のゼミに所属する学生で研修会にリモート参加し、それ以降は参観できた。
- 40 地震防災教育・保育については、高知大学山田伸之と科研費での共同研究を行ったため、別途報告。2021年11月12日や2022年11月2日にテレビ和歌山、NHK関西、読売テレビなどでも放映されて紹介された。
- 41 丁子ら前掲32.
- 42 同上, p.139.
- 43 同上, pp.139-140.
- 44 同上, p.140.
- 45 同上, pp.140-142.
- 46 前掲33と同様、科研費での調査であるため別途報告。
- 47 丁子ら前掲33.
- 48 同上
- 49 同上
- 50 同上, p.153
- 51 校長は自身の成長の記載ではなく教職員や学校について成果を記載していた。
- 52 前掲33, p.152-154.
- 53 同上
- 54 丁子ら前掲33, pp.108-113.
- 55 丁子ら前掲33.
- 56 その際に参観していた和歌山大学教育学部の学生の一人も小規模校出身者がいたため、話を聞いたところ、児童が日頃から自分たちで責任をもってやっていくことを学べてとても良かったと話し、そういった温かい見守ってくれる小学校教員を目指していると語った。
- 57 丁子ら前掲34.
- 58 同上
- 59 同上, p.113.
- 60 同上
- 61 同上
- 62 同上
- 63 樋口耕一『社会調査のための計量テキスト分析—内容分析の継承と発展を目指して【第2版】KH Coderオフィシャルブック』ナカニシヤ出版, 2020.